

人は創造（想像）するいきもの

（第八月号）

夏が始まっていますね。皆さんの夏休みの予定はいかがでしょう？

海に面していないフランスのパリでは、街に流れるセーヌ川にビーチをつくって海に行ったつもりになれる“パリ・プラージュ”という催しがあるそうで、パリジャンやパリジェンヌは夏を楽しんでいるようです。

さて今回は、“～のつもり”をテーマにした落語を紹介したいと思います。

～だくだく～

着の身着のまま長屋に引っ越してきた八五郎。

前の家では家賃を滞納して追い出され、その時に滞納分をなんとかするため家財道具を全部売ってしまい、本当に何も持たず、身体一つになってしまった。

引っ越してきた長屋は古く、壁のあちこちに穴が目立つので、なけなしのお金を使って壁から床や天井まで白い壁紙を貼ることにした。

綺麗になったことに満足した八五郎だったが、どうも殺風景なのが気に入らない。

そこで、近所に住む絵の先生のところへ行って、壁紙に絵を描いて欲しいと頼んでみた。

ちょうど暇だった絵の先生は引き受けくれて、八五郎の長屋にやってきた。

「先生、手始めに床の間を描いてください」

「掛け軸は、山水でお願いします」

「こっちは茶箆筒。茶箆筒の上には大理石の置き時計も欲しいな」

「そこに桐の箆筒も描いてくれ。引き出しは少し開けて、そこから着物が見えるようにして」

「あとは金庫を描いてもらって、扉は半開きで、札束がたんまり見えるように」

「火にかけて鉄瓶は湯が沸いてチンチンいっているところを・・・」

先生が『音は出ないよ』と言うと、

八五郎は「気は心というでしょう。いいんです。みんな“つもり”なんですから」と返す。

八五郎は調子よく、注文し放題。

「壁の上の方に、槍も一本、描いてもらいましょうか」と言い、
先生が『高くて届かないよ』と言えば、
八五郎は「そこに踏み台を描いて、載ればいいでしょう」と言う始末。
「絵に描いた踏み台には載れない」と先生に言われ、
仕方なく八五郎が四つん這いになり、槍まで描いてもらう。

さて先生も帰り、殺風景だった家は、絵ではあるけれどずいぶん豪華に様変わり。
満足した八五郎がウトウトしていると、泥棒が玄関の隙間から八五郎の家の中を覗いている。
その泥棒は目が悪かったので、ずいぶん立派な家財道具のある家だと思い込み、
八五郎が寝ていることをいいことに忍び込む。
八五郎は泥棒に気がつくが、盗まれるものもないので、寝たふりをしながら様子を見ることに。

泥棒は置き時計や着物、金庫の中身を盗もうとしても取れない。
ようやく絵だと気づいた泥棒は……

その後、八五郎と泥棒のやり取りがどんな展開になるのかは、ぜひ「だくだく」を聞いてみてください。
なぜ落語の題目が「だくだく」なのかもわかります。

このお話は、実際にはそうではないことでも、そうである“つもり”になることで、
人は気持ちを満たしたり、人とやり取りを弾ませることができるといったテーマがあります。
子ども時代に、皆さんも「ごっこ遊び」をしたのではないのでしょうか？それと似ています。
おままごと、〇〇ごっこ、などそうなった“つもり”で“真剣”に遊びます。
大切なのは、「本当はそうじゃないけど……」などと思わず、
何もなくてもある“つもり”になって、八五郎のように“真剣”になることです。

最近、コロナの感染者が再び増えてきたと言われています。
現実的にあちこちに移動したり、遊びに行くことに躊躇する日々が続きます。
そんな時こそ、私たちが小さい頃からもともと持っている創造力（想像力）を使ってみませんか？
総合相談部門も一緒に考えていきたいと思っています。

専任カウンセラー 後藤 龍太